

## フッサールにおける自我・反省・時間

榊原 哲也

### 1. はじめに

拙著『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』（東京大学出版会、2009年）は、未公刊の遺稿も含めフッサールの残したテキストにできる限り即して、その内側から、フッサール現象学の生成全体を、とりわけその方法の成立と展開に注目しながら、可能な限り年代順に辿り直すことを通じて、フッサール現象学の方法の意味と射程、そしてその現代的意味を見定めることを意図した、フッサール現象学の「方法」に関する内在的批判の書物である。したがって拙著は、本来的には、本シンポジウムのテーマである「自我と原自我」を中心的な主題としたものではないことを、最初にお断りしておかなければならない。

けれども他方、拙著では、フッサール現象学の方法の成立と展開を、フッサールが見つめていた〈事象〉との関わりにおいて丹念に追跡することを目指したため、方法の成立と展開の過程でフッサールが「自我」と「原自我」という事象を見つめたかぎりにおいて、拙著でも、彼の残したテキストに即しつつ、「自我」と「原自我」をめぐる立ち入った考察が行われている。

そこで、本提題では、拙著の論述全体のなかから、そうした「自我と原自我」をめぐる論点のみをいくつか提示することによって、シンポジウムの議論の叩き台としたい。

なお、フッサールは、思索の展開のなかで、「経験的自我」、「心的自我」、「人格的自我」、「純粹自我」、「原自我」など、様々な自我概念を提出しており、拙著でも「方法の成立と展開」を追跡するなかで、これらについて適宜、考察を加えているが、田口茂氏のご著書『フッサールにおける〈原自我〉の問題』との関係から、本提題では「純粹自我」と「原自我」のみに主題を絞りたい。

### 2. 純粹自我について

「純粹自我」に関する拙著のテーゼは以下の通りである。

純粹自我は、『イデーニ I』の鉛筆書き草稿および『イデーニ I』本文において、

〈どの顕在的コギトからも反省によって取り出されうる同一の自我、コギトの自我〉として認められ（拙著 227～228 頁）、『イデーニⅡ』原草稿において、「時間的に存在するもの」として捉えられた。そのことによって、その後の発生的現象学の思想展開が促された（拙著 232～236、240～241 頁）。

純粹自我は、〈コギタチオの流れである体験流を統一し、体験流のあらゆるコギタチオの内を生きている、それゆえ去来するコギタチオとは別の仕方では時間的に存在する同一の自我〉であり、体験流の全体とともに内的時間意識において構成されるもの（拙著注 101 頁）、反省によって見出されるものとして、位置づけられる。

### 3. 自我概念の展開

これに対して、中期時間論において、自我の概念は、〈それ自身は時間的ではなく、したがって内的時間意識において構成されるのではなく、自ら時間を構成し、機能する自我〉という概念にまで深められ（拙著注 101 頁）、これが後期時間論において「究極的に機能する自我」としての「原自我」の概念へと展開することになる。中期時間論において、自我が「機能する自我」として捉えられることになった決定的テキストの一部を、以下に引用する（拙著では注 101～102 頁で引用）。

「しかしここで論究しておかなければならないのは、すべての諸体験に対する、そしてその諸体験の志向性そのもののうちに存在者として含まれているすべてのもの（例えば思い見<sup>フエア</sup>な<sup>マ</sup>されているがままの思い見なされた自然）に対する自我は、すべての時間系列に対する極であり、そのようなものとして必然的に『超』-時間的であるということ、つまりそれに対して時間が構成される…がそれ自身は時間的でないような自我であるということである。したがって、この意味ではこの自我は『存在者』ではなく、あらゆる存在者に対してその対を成すもの（Gegenstück für alles Seiende）であり、対象ではなく、あらゆる対象性に対する原象（Urstand für alle Gegenständlichkeit）である。この自我は本来的には自我と呼ばれるべきではないし、断じてそう呼ばれてはならない。自我と呼ばれてしまったら、それはすでに対象的なものになってしまっているからである。それは、把握可能なすべてのものを超えた名前を欠いたものであり、…存在者ではなく、把握する、評価するなどといった仕方では『機能する者』（[das „Fungierende“]）なのである」（XXXIII, 277f. 強調は榊原による）。

#### 4. 時間化された次元と時間化する次元

自我概念の展開は、フッサールにおける静態的現象学から発生的現象学への思索の展開とも密接にかかわるものであるが、この点に関して、拙著が繰り返し強調したのは、時間化された内在的時間（体験流）の次元と、それを時間化・構成するそのつどの生き生きした現在（時間化する次元）との区別、そして両者の間の相互関係であった。フッサールの残したテキストに即するかぎり、自我と原自我をめぐる問題は、この次元の相違とその間の相互関係を踏まえつつ議論されなければならないのである。

#### 5. 原自我について

それでは、「原自我」という概念は、どのように理解されるべきだろうか。それは、生き生きした現在における生の極化した機能（*Fungieren*）を名指すために用いられた語であり、それによって、反省され対象化された「自我」主体が意味されているわけではないことに、注意しなければならない。けれども、そうは言っても、生き生きした現在におけるこの生の機能は、「現象学する目覚めた私」によって「適切な反省」において見出されるので、「私の」機能として捉えられ、「原自我」として言語化されざるをえない。しかも、名指されることによって時間化・存在者化され、内在的時間のうちに位置づけられるので、「原自我」は必然的に〈時間化しつつ時間化される（自我）生〉において捉えられざるを得ない。後期時間論のテキストを踏まえた「原自我」に関する拙著のテーゼは、以上のようにまとめられる。

#### 6. 自我・反省・時間

上述の事態は、「自我」と「反省」と「時間」とが密接に絡み合うような事象であることを示しているが、この点に関する拙著での、テキストに即した具体的な分析と解釈を、いささか長くなるが、以下に引用しておきたい（拙著 399～404 頁。ただし拙著では巻末に置かれた注を脚注とし、本提題に関わりのない注やその部分については省略した。また引用箇所を表示についても、C 草稿への指示は省略した）。できる限りテキストに即して、その内側から解釈を立ち上げる、拙著の基本姿勢をもう理解いただければ、と思う。

[399] [...] 手がかりを与えてくれるのは「一九三一年九月」<sup>1</sup>に書かれたとされる

---

1. Vgl. Mat VIII, 185, Anm. 1, 189, Anm. 2, 194, Anm. 1; vgl. auch Dok I, 388.

草稿 (C 10) である。この草稿は、「原現在化 (原初的な流れ)」にすでに属している「触発を受けたり能動的に活動したりする自我 (Ich in Ich-Affektion und -Aktivität)」を扱ったものであり (Mat VIII, 183)、フッサールはそこで、「(目覚めた反省する分析家の現在としての) どの生き生きした原現在のな現在にも、すでに自我触発を受け自我作用を遂行する自我 (Ich mit Ichaffektion und Ichakt) が属している」(Mat VIII, 186) と述べている。このことが具体的に何を意味するのかについて、少し立ち入って考えてみたい。

フッサールによれば、「私は…適切な反省 (passende Reflexion) によってのみ、主題的自我の背後に機能する自我が潜んでいることを知る」(Mat VIII, 190) のだが、この「適切な反省」を行っているのは、「目覚めた反 [400] 省する分析家 (der wache reflektierende Analytiker)」(Mat VIII, 186) のその「目覚めた生 (waches Leben)」(vgl. Mat VIII, 190) に他ならない。ここで、目覚めた生とは、そのうちで「極としての自我が…そのつどの触発と作用の極として、対立極である触発してくる統一体 [=ヒュレー]、ならびにそれに向かう作用と一緒に現れてくる」(Mat VIII, 189) ような生であるが、そこでは「触発に反応する自我」が「おのれの世界に『対して』『立ちとどまる』同一的な自我」として「つねにすでに構成されており」、世界のほうも「自我にとって構成されている」(Mat VIII, 186)。このような生において、ヒュレーに触発されて、多様な「諸作用」が遂行されるわけである (vgl. Mat VIII, 190)<sup>2</sup>。フッサールによればその際、これらの作用も「必然的に触発的」であり、「諸作用のな

---

2. フッサールはすでに一九二〇/二一年冬学期の「超越論的論理学」講義において、「目覚めた自我 (waches Ich)」の「目覚めた生 (waches Leben)」について論じていた。そこでは、自我は「とくに自我的な機能 (spezifische Ichfunktionen) を顕在的な仕方ですべて遂行している」限り「目覚めている」とされ、目覚めた自我は「知覚作用」や「判断作用」や「感情作用」や「意欲作用」といった「目覚めた諸体験 (Wacherlebnisse)」の「中心」として、これら諸作用のうちに生き、これら諸作用を遂行し、知覚されたものや判断されたものや意欲されたものに関わっている者として、どんな場合にもそこに「居合わせている (dabei)」と言われていた。この自我を「主題的に経験する」ためには「固有の反省」を行わなければならないが、いずれにせよそれは「反省によって明示されうる生と体験作用の中心 (ein durch Reflexion aufweisbares Zentrum für das Leben und Erleben)」として、目覚めた生のどこにおいても「居合わせている」のである。これに対して、「目覚めていない、最も広い意味で朦朧として眠っている生」においては「とくに目覚めているという性格を具えた体験が何もなく、主体として顕在的な自我がそこに居合わせていない」が、「目覚めた自我生 (waches Ichleben)」は、「目覚めていない背景 (Hintergrund der Unwachheit)」をつねに必然的に携えつつも、このような生からは区別されるのであり、目覚めた自我生においては「目覚めた自我」が「とくに目覚めているという性格を具えた諸体験、すなわちエゴ・コギトの諸体験」を遂行し、さまざまな志向の対象に関わっている、とされていたのである (vgl. XVII, 362-364)。

また一九二五年夏学期の『現象学的心理学』講義においても、〈それにとっては内面的にも超越的にも何も際立ったものがない「朦朧とした眠った自我 (dumpfes, schlafendes Ich)」に対して、志向性を働かせて「志向的对象性に向かい、それに関わり」またそうした対象性から「刺激を蒙り…作用へと動機づけられる」ような自我が「目覚めた自我」と呼ばれていた (IX, 208f.)。

かでそれらの合致極として現れる自我」も「つねに触発的」である (Mat VIII, 193)。それどころか、これらヒュレーに向かう諸作用やそれを遂行してきた極としての自我から触発されることで、自我は初めて機能しうる、とさえ言われる。「機能する自我 (Ich in Funktion) は…機能するために、そして当の自我を存在者化すべく機能するためにも、触発を必要とする」(Mat VIII, 187) のだが、より厳密には、「自我は、〈自己自身つまり機能する者としての自己〉を触発することなしには、機能することができない」(Mat VIII, 193)<sup>3</sup>のだ。この事態をフッサールは「機能する自我の必然的な自己触発 (notwendige Selbstaffektion des fungierenden Ich)」(ebd.) と呼ぶが、「目覚めた生」においては、この機能する自我の自己触発という事態も生起しているのである。さてここで、フッサールが、「あらゆる触発はすでに〔時間化され〕構成された統一体から発する」(Mat VIII, 186) と考えていることをも、合わせ考慮するならば<sup>4</sup>、「適切な反省」がそのうちで遂行される「目覚めた生」とは、次のような生——すなわち〈流れることにおいて、機能する自我によって、世界がすでに構成されており、ヒュレーに向かう諸作用やその極である自我もすでに時間化され構成されており、このように「そのつど匿名ではあるがつねにすでに構成されているもの」(Mat VIII, 187) から当の機能する自我が触発されることで、[401] 諸作用の遂行と自我極のさらなる時間化、そして世界の構成が促されていくような生〉であると考えざるをえない。このような生こそ、「(目覚めた反省する分析家の現在としての) どんな生き生きした原現在化的な現在にも、すでに自我触発を受け自我作用を遂行する自我が属している」とフッサールが述べるときに、彼が捉えていた事象であると考えられる<sup>5</sup>。

---

3. „Es [= das Ich] kann nicht fungieren, ohne sich selbst, sich als fungierendes, zu affizieren.“

4. フッサールが「あらゆる触発はすでに〔時間化され〕構成された統一体から発する」と考えている、というこのことを、われわれは真摯に受けとめなければならない。というのも、このことを考慮に入れるならば、〈機能する自我の自己触発〉という事態は、〈機能する自我が、直接に機能する自我を触発する〉のではなく、〈自我の時間化／存在者化／構成の機能によって (反省的に対象化されておらず匿名であるにせよ) 同一極として時間化／存在者化／構成された自我が、機能する自我を触発して、この自我のさらなる時間化／存在者化／構成の機能を促す〉、そのような事態であることになるからである。〈機能する自我の自己触発〉とは、まさに、〈時間化によって自己が時間化されて差異化し、時間化された自我から触発されて同一化しつつさらに自己を時間化していく〉といった根源的な差異化と根源的な同一化とを内に孕んだきわめて力動的な事態である。若きデリダは、まさにこの事態を「アプリアリで同時に弁証法的な存在論的综合 (synthèse ontologique a priori et en même temps dialectique)」と呼んだのである (PG, 126)。

5. フッサールは一九三二年三月に書かれたとされる草稿でも、次のように述べている。「機能する者 (das Fungierende)」としての「自我」は「どこにおいても『その場に居合わせて』 (überall „dabei“) あり、このような「構成の働きをするあらゆる触発と作用の中心」として私は「絶えず体験し - 能作する自我」であり、「時間化されかつおのれを時間化するもの

さて、目覚めた反省する分析家の生き生きした現在が、以上のような目覚めた生の現在であるとすると、そこにはつねに〈触発を受け作用を遂行する機能する自我〉が属している以上、この分析家がなす「適切な反省」において、まったく自我を欠いた (ichlos) 現在が出現することなど、本来的にはありえない。たとえ、解体によって生き生きした現在の把持と予持のすべての地平をエポケーし (それまでに時間化され構成されてきた自我とその諸作用もカッコに入れ) て「流れる現在」の「原的な流れること (Urströmen)」(Mat VIII, 185) に還元したとしても、そこにはこのエポケー・還元という作用に触発されて「原的な流れること」を反省しようと機能する目覚めた自我が居合わせるであろう。さもなければ、目覚めた反省する分析家による「適切な反省」という現象学の営みそのものが成り立たないはずである。先に第四節においてわれわれは、フッサールが一九三三年一月初めの草稿で、原 - 自我から自我への自己時間化を、〈「一般的意識」において遂行される「意識の自我」への第一次的な時間化〉と〈「意識の自我」からおのれの歴史をもつ自我への第二次的な時間化〉という二重の自己時間化として解明していることを明らかにしておいたが、「適切な反省」によって (いわば) 存在論的に明示される〈「意識の自我」以前の「一般的意識」における時間化〉という事態も、「適切な反省」が「目覚めた反省する分析家」によってしかなされ得ないとすれば、やはり、当の事態を反省において時間化し構成する目覚めた自我と共にしか語りえないであろう。まさに一九三二年七月のフッサールが述べていたように、適切な反省においては、原的な「流れること」とともに「超越論的現象学的に目覚めた自我」もまた、つねに「先立って在る」のである<sup>6</sup>。

[402] この「適切な反省」の構造を、先に明らかにした目覚めた生の自己触発の構造に即して、もう少し考えてみることにしよう。通常のリフレクションが、〈目覚めた生において時間化され構成されて、そのことによって触発の働きをしてくる自我やその諸作

---

として絶えず『意識されて』いる (ständig „bewusst“ als gezeitigt und sich zeitigend)」(Mat VIII, 338)。

6. したがって、超越論的自我的活動をまったく含まない、自我を欠いた「先自我」の次元をことさらに強調する山口一郎 [2005] の議論や、「超越論的領野」に「誰のものでもない」匿名性という性格を付与しようとする斎藤慶典 [2000] の議論に対しては、筆者は懐疑的である (斎藤の議論に対する筆者の立場については榊原哲也 [2001] を参照されたい)。現象学の営みにおける自我の位置に関する筆者の立場は、現象学的な「見ること」に不可分に属する「原 - 自我」を強調する田口茂 (Taguchi [2006]) の立場にきわめて近い。けれども、筆者が田口と異なるのは、田口が「原 - 自我」をあくまで「時間化」の秩序の手前で「あらゆる時間的現出の『媒体』」として捉えるのに対して (Taguchi [2006], 145, 194f.)、筆者はこの「原 - 自我」の「自己差異化」の在り方 (vgl. Taguchi [2006], 219, 221) を、〈時間化しつつ時間化され、時間化されたものから触発されてさらに時間化の機能を果たす機能する自我の自己触発の在り方〉として、まさに時間化との関わりにおいて捉える点である。

用)に向かって、これらを主題化するのに対して<sup>7</sup>、「適切な反省」は、この自我と諸作用から遡って、〈この自我の「背後で」——より適切にはこの自我の手前で——この自我を時間化し構成したはずの「機能する自我」〉に達しようとする。その際、先の考察によれば、目覚めた生は、流れることにおいて機能する自我がその機能によって〈ヒュレーに向かう諸作用とその極たる自我〉をそのつど時間化し、こうして構成された〈自我極とヒュレーに向かうその諸作用〉から当の機能する自我が触発されることで、自己時間化の機能がさらに促される、そのような在り方をしているのであるから、目覚めた生において遂行される、機能する自我への「後からの」「適切な反省」<sup>8</sup>とは、時間化され構成され把持されて触発の働きをしてくる〈自我極とヒュレーに向かうその諸作用〉を手引きとして、これらを時間化した〈機能する自我〉に遡り、この自我——すなわち〈諸作用を遂行する自我極として自己を時間化することで、時間化されたこの自我極とその諸作用から触発を受け、さらに自己を時間化していく「機能する自我」〉——を捉えようとする反省に他ならない。認識論的に見れば、この反省は〈時間化され構成され把持されて、触発の働きをしてくる自我〉に眼差しを向け、それを手引きとして、まず〈流れることにおいてこの自我を時間化した機能そのもの〉に遡って到達しようとするが、この機能は当の反省においては時間化され存在者化されて〈機能する自我〉として捉えられるため<sup>9</sup>、この時間化された〈機能する自我〉から触発されて、反省はさらに、それを時間化した機能に遡ろうとする。こうした反省の繰り返し、すなわち「反復的な反省」において、〈匿名のまま機能し、反省を反復する原 - 自我〉が遡及的に〈機能する同一の自我極〉として必自然的に明示され、その「一般的」な「形式」的本質構造が連合的に合致して際立ってくる (vgl. C 10, 7b: Mat VIII, 190)。こうして(遍)時間化され存在者化された本質構造がいわば存在論的に記述されたのが、先に述べた目覚めた自我生の在り方、すなわち〈自己を時間化 [403] することで、時間化された自己から触発され、さらに自己時間化していく、同一の機能する自我〉という在り方なのである。適切な反省が、右に述べたような構造をもつ目覚めた自我生において後から遂行される限り、この反省は、このように遂行される以外にはない。認識論的に〈別様には考えられない〉し、存在論的に〈別様ではありえない〉のである。

以上の考察からすれば、内的な自己感触がいったい何であるのか、そして「適切な反省」が機能する自我の自己感触にどのように基づいているのかについても、以下のように解釈できるだろう。

---

7. Vgl. Mat VIII, 189f.

8. Mat VIII, 190.

9. 「真の時間化とは、流れによる、流れとしての時間化ではなく、私、つまり超越論的現象学的自我のなす時間化である」(XXXIV, 184)とフッサールが述べるときに、彼のうちに生起しているのも、この事態であると考えられる。

現象学的反省を主題化していく認識論的アプローチのなかで、「適切な反省」は、時間化された〈主題的自我〉から遡及的に〈機能する自我〉を明示する。けれども、今やこの自我が、〈時間化することで時間化され、時間化されたものから触発されること〉でさらに時間化が促される、そのような目覚めた自我生」という在り方をして、いることが存在論的に明示されたのであるから、〈機能する自我〉の内的な自己感触とは、必当然的に、この〈機能する自我〉の目覚めた自我生の在り方でなければならないであろう。つまり、自己時間化によって自己自身から〈時間化されたもの〉として原的に（すなわち能動的にではなく、いわば原受動的に）差異化しつつ、それでいて時間化された自己からの触発によって自己のさらなる時間化が促されるという形で原的に（すなわち能動的にではなく原受動的に）同一であり続ける機能する自我の、その目覚めた在り方、自己時間化における〈等根源的な原的差異化と原的同一化の原的動性〉としてのこの在り方こそが、自己感触という内的な原意識であるのであり、目覚めた自我生はそれゆえ、その在り方において、自身のうちにこの自己感触の構造を含みこんでいるのである。「適切な反省」は目覚めた生において遂行されざるを得ないわけであるから、「適切な反省」もまた構造的にこの内的な自己感触に基づいている。まさに、目覚めた自我生が〈自己を時間化し、時間化された自我から触発されて、さらに自己を時間化していく在り方〉をしており、そのことによって、機能しつつ時間化する自己を感触しているがゆえに、「適切な反省」は、〈時間 [404] 化された自我〉を手引きにして、〈その背後で——いやむしろ手前で——機能している時間化する自我〉について、後からその一般的形式的な本質構造を知りうるのである。「適切な反省」が機能する自我の自己感触に基づくことの根拠は、以上のように、機能する自我生の在り方それ自体のうちに見出されうる。そして、このような認識論的かつ存在論的な解釈の試みこそ、〈生き生きした現在において機能する自我への適切な反省〉に関する、フッサールの思索の動向に適ったさらなる可能な解釈の試み——「現象学を営む自我の現象学」、「現象学の現象学」(XXXIV, 176) としての方法論的考察の試み——であるように思われるのである。

## 7. シンポジウムを終えて

シンポジウムでは、ディスカスタントの吉田聡氏、武内大氏をはじめ、様々な方からご質問やご批判を賜った。そのすべてにお答えすることはできなかつたし、また今もできないが、いくつかの点について、目下出来る限りでの応答を試みておきたい。



### (1) 自己感触と反省との関係について

拙著で主題化した「適切な反省」は、通常現象学的反省が時間化された内在的時間（体験流）の次元を動くのに対して、時間化する次元に入って行く点が異なる。拙著 402 頁で、「通常反省が、〈目覚めた生において時間化され構成されて、そのことによって触発の働きをしてくる自我やその諸作用〉に向かって、これらを主題化するのに対して、「適切な反省」は、この自我と諸作用から遡って、〈この自我の「背後で」——より適切にはこの自我の手前で——この自我を時間化し構成したはずの「機能する自我」〉に達しようとする」と述べたとおりである。ただしこの「適切な反省」も、通常反省と同じく「自己感触」に支えられている。この「自己感触」は、初期時間論以来の「内的意識」が捉え直されたものであり、通常反省であれ、「適切な反省」であれ、それが「後からの反省」であるかぎり、それを支える可能性の条件であるが、それが単に「考えられた」だけの「可能性の条件」でなく、直接、内側から生き抜かれているものであることが、「自己感触」という「触れること」のメタファーによって表現されているのだと考えられる。内的意識としての自己感触は、つねに後からのものとならざるを得ない「反省」という方法を可能にし、保証している、いわば「これ以上遡ることができない」現象学の方法の究極的な支えである。確かに、そのことが示されたからと言って、「反省」という方法の性能が改善されるわけではないが、認識論的な観点から見れば、究極的な根拠であり保証である。拙著が示したように、フッサールの思索の歩みが終生、認識論的な明証を追究してきたのだとすれば、この点は極めて重要だと言わなければならない。

### (2) 認識論的アプローチと存在論的アプローチをめぐって

認識論と存在論とは、むしろ、たがいに背反する相容れない対立概念ではない。なるほど、「認識論」とは、物事や人々から成る世界がいかにして、またどこまで理解され認識されるのかを問う哲学の一部門であり、「存在論」とは、物事や人々から成る世界がどのような在り方をしているのか、そもそも存在とは何かなどを問う哲学の一部門であるという理解が一般的ではある。しかし少し立ち入って考えてみれば、認識論は物事や人々についての認識を問うことによって、認識された物事や人々の在り方を明らかにすることになるし、また存在論も、とりわけ人間の在り方を問うことによって、人間の認識の仕方を明らかにすることになる。認識論と存在論とは問いの方向こそ異なるものの、その区別は必ずしも絶対的なものではない。

けれども、フッサールの後期時間論の記述を、テキストに即して十分に理解するためには、この区別は、いわば理解の「補助線」として、有効に働くように思われる。拙著第三部第四章で詳論したように、フッサールは後期時間論のテキストにおいて、後からの「適切な反省」は自己感触に支えられつつ、時間化され把持されたものを通じて、機能する時間化の働きを、匿名のまま「機能する極」として明示す

る。それが、生き生きした現在における生の機能を反省によって徹底的に認識していこうとする、私の言う「認識論的なアプローチ」である。しかしフッサールはさらに、この究極的に機能する匿名の極を「機能する自我」ないし「原自我」と名指した上で、そこから時間化のプロセス（つまり時間化の機能による時間化されたものへの構成のプロセス）をたどろうとする。これは、自己感触に支えられつつも、時間化され把持されて反省によって捉えられたものに基づくかぎり、「別様では在りえない」として、匿名の「時間化」の機能を「～である」と述定していくプロセスであるから、その意味で「存在論的アプローチ」として特徴づけることができる。フッサール自身は、こうした用語法を用いてはいないが、この二重のプロセス——すなわち、「まず認識論的視点から、匿名のまま機能しているものを内側から感触しつつ反省を反復することによって、時間化され把持された「私の具体的機能」から遡及的に、〈別様には考えられない〉という必自然的な仕方、先の匿名の機能を〈機能する自我ないし原 - 自我〉として明示し、さらにこの自己感触に支えられて、この先 - 存在的な原 - 自我からの自己時間化の在り方をもいわば存在論的に、〈別様では在りえない〉という必自然的な仕方、明示する」（拙著 393～394 頁）というプロセス——を、フッサール自身はある草稿のなかで、「遡及的 (regressiv)」な考察の仕方と「前進的 (progressiv)」な方法的探究と特徴づけていた (vgl. Mat VIII, 187) (拙著注 103 頁)。したがって、この二つのアプローチは、フッサール自身のテキストに即して読み取られたものと言ってよいのである。

後期時間論のテキストを十全に理解するためには、テキストの記述にあくまでも即して、フッサール自身の探求の眼差しがどのように動いているのかを、いわば内側から理解することが肝要であるが、私としては「認識論的アプローチ」と「存在論的アプローチ」という性格づけによって、後期時間論のテキストがより良く理解できることを、拙著において典拠を示しつつ明らかにしたつもりである。

### (3) 田口茂氏の「原自我」の捉え方について

私は、田口氏のドイツ語の原著を以前に拝読し、またこのたび邦訳も拝読して、田口氏が私ときわめて近い立場に立っておられるのだと受け止めてきたのだが、シンポジウムにおいて、両者の立場ないし視点の、むしろ差異の方が際立ったことが、私にとっては最大の驚きであり、また収穫でもあった。

田口氏のご著書において、「原自我」を主題化しつつも、「時間意識」の深みや「発生」といった、私から見ると「原自我」に密接にかかわる問題群にほとんど触れない。しかしそれは、名著『生き生きした現在』をものしたクラウス・ヘルト氏のもとで博士論文を仕上げた田口氏の一つの戦略であり、田口氏の論述の背景には、時間論や発生的現象学への配慮があるのだと、私は受け止めてきたのである。

けれども、シンポジウムにおいて、またその後の会話において、その点を問いた

だしてみると、「原自我」を「時間意識の深み」において捉える考え方は取らない、また「原自我」を発生的現象学の文脈でとらえることもしない、とのことであった。したがって、田口氏の〈原自我〉概念は、私が拙著で展開しているような、原自我を〈時間化しつつ時間化される（自我）生〉の在り方において捉える考え方とは全く異なるものであり、また、ヘルト氏があれほど強調した「反省の後から性（Nachträglichkeit）」に起因する「生き生きした現在」の謎も、田口氏にとっては存在しないことになるのである。

しかし、これは私にとっては到底首肯しがたい立場である。確かに「原自我」概念が表立って展開されたのは、『危機』書においてであり、そこでは必ずしも時間論の観点からではなく、「原自我」概念が提出されてはいる。しかし『危機』書執筆のいわば直前まで、しかも「原自我」という概念をも用いながら、後期時間論において、究極的に機能する自我ないし原自我を時間意識の深みにおいて考察してきたフッサールが、『危機』書において、それとは全く無関係に「原自我」概念を提示することなど、ありえないと思われるからである。

田口氏は「志向的変様」論を展開するときにも、それをあくまで意味の基づけ関係として、つまり静態的構造として捉えようとする（cf. 213-216 頁）。それが、シンポジウムの前までは、私には不思議でならなかった。というのも、原様態と変様態との関係は、意味の基づけ関係として静態的構造的に捉えることが可能だとしても、逆変様（原様態が変様のあとで「変様態に対する非 - 変様態」として、*un-modifiziert* という意味で現われて来ること）（189 頁）は明らかに必然的な時間的前後関係、つまり発生的関係を前提しており、事象そのものに即してみても、単なる意味の基づけ関係として、つまり静態的構造としては捉えられないと思われたからである。

これに対し、拙著で私は、静態的な構造を記述する「静態的現象学」にたいして、「発生的現象学」とその方法の特徴をできる限り明らかにし、さらに発生という事象を時間論の観点から、時間化する次元と時間化された次元とを分け、その双方で、そして両次元の間で、発生がどのように生起し、論じられるのかを明らかにしようと試みた。

こうした観点からすると、原自我に関する「志向的変様」は、発生的に捉えられなければならない。すなわち、原自我の原様態からの変様は、〈時間化による時間化された様態への変様〉として、また逆変様は、〈時間化されたものからの触発によるさらなる時間化〉として、時間的・発生的な出来事として捉えられなければならない。田口氏は、「原自我」の「媒体」的性格を強調するが、「媒体」として性格づけてしまったために、その構造やその内で何が生起しているのかが、見えなくなってしまっているように思われてならない。けれども、その「媒体」においては、後期時間論から見えてくるような〈時間化しつつ時間化され、時間化されつつ時間化す

る生)が生起しているのではないか。私には、それこそが、残されたフッサールのテキストに即し、その内側から考えうる解釈の可能性であり、また事象に即した解釈でもあるように思われる。